

# ミオヤの光

佛格の卷

## 彌陀の佛格

如來アミダはいかなる佛格なるか從來アミダ佛を説くこと區々たり。或は法身のミダあり或は報身のミダまた應身のミダあり、また眞如身のミダ或は神話的のミダ或は擬人的表式の一隅に置くミダあり、或は厄病救除のミダまた冥土の福祉を興ふるミダあり。

また自然の因果律を宗教化したる酬因感果の人格的佛身の説あり、古來彌陀の説また彌陀に對する觀見の區々である。吾人は、彌陀は大乗佛教中最も宗教的眞意の本尊として信じ來りし。彌陀は本來宇宙唯一獨尊絶對的威力ある靈格を稱するものなれば其實體に至つては不可説である。なれどもそれに對する觀念の種々に異なる所以は機見の區々である。即ち宗教的意識の階級によりて其對象其觀念の異なるは他ならず、佛教の眞理は本來異なるものにあらず、然れども機類に隨て其理を示すに相同じから

ず。

天臺が佛教を判ずるに藏通別圓の四教を以て判割する如く、彌陀に對する觀念もまた然り。幼稚なる原始的宗教の爲には彌陀は現世幸福の守護神たるものと信じまた超然未來の幸福主義の爲には彌陀は未來の福祉を興ふる神と信じ、また神話傳記固執主義の爲にはそれに相應したる傳説を以て彌陀を信ず。

本來彌陀は絶對的偉大の力を以て一切萬法を統一する靈力なれば、宗教的信念に對する感應何れかそれ彌陀の靈驗ならざるものぞ。しかれば蓋は唯彌陀の一分を信ずるに止まりて彌陀の全なるにあらず、彌陀の不了教藏通別教の説たると同じ、いまだ了教圓滿の觀にはあらず。苟くも宗教的意識の客體なる本尊には獨尊統攝歸趣の三義備りて初めて本尊とし絶對的の歸命信賴も成立すべし。故に吾人の信ずる處の彌陀は法報應各別にあらず、三身一體の彌陀、本有無作の實體たると同時に一切因果の法則を實現するの大原則にて、本然自性無始無終永恆活存の靈體なれば無量壽と曰ひ、また法界十方に徧滿し、一切の時一切の處を普く照鑑して一切を救濟す故に無量光と名づけ、十方三世諸佛神明を統括する尊體の故に無量尊と號く。

故に楞伽經には十方一切法報應化佛一切菩薩等は悉く彌陀佛國より生ずと。實を尅して論ずれば宇宙間一切萬法を貫き眞理の存在するは是永遠無量光にして自然界にも心靈界に亘りて一切の生々存在は悉く無量壽の顯現ならざるはなし。

彌陀本來絶對的眞理にして相待分別の人間の説の爲に左右せらるるものにあらず。大活眼ある者には活ける彌陀の大身心顯現し分別固執の輩には分別分身の彌陀を信ず法眼開く時は天體無窮地上の森然一として無量光の照さざる處なし。一切萬物の中に在りて神光輝く萬物のみにあらず、人格の無量光の活現せる釋尊はいはずもがな、孔子、キリスト、マホメット等の聖賢悉く彌陀の活現に外ならず。

彌陀は法性身本有無作の實體なれども衆生を度せん爲に方便法身を出す。即ち法藏の發願十劫正覺の佛身是なり。方便法身により法性法身を顯はすと、方便法身十劫正

覺は即ち本有無作の無量光を世に示さんが爲なり。

大經は方便法身を説示して本有自然の無量光を顯す。故に吾人は方便法身を信ずると同時に法性法身を信ずる也。

## 一 種 法 身

問、如來の法身はすべての色相に超絶し無色無相なりとも聞き侍りけるに、または法身相を具すること三十二等の聖文處々に説きたまふことこれいかなる故ぞと。

答て。三昧の輪を以て淨土の門を開き、如來の法身萬徳圓滿のいと麗しき相好及び清淨國土の相を見んと欲せば、先づ須らく如來の本質はいかなるものなるかを知らざるべからず。今如來の法身を識らんと欲せば二種法身の理を解すべし。而して後次第して淨土に在すいと麗しき相好法身を拜むべし。

今聖曇鸞の論註によりて二種の法身説を暫らく解説せん。請ふ聽かれよ。曰く如來に二種法身あり。一には法性法身。二には方便法身となり。法性法身より方便法身を出し、方便法身によりてまた法性法身を顯はすと。蓋は如何なる理由なりやと云はんは、法性法身とは、本然自性にて即ち自性天真佛とも本覺の如來とも名づけて、始もなく終りもなき本有自存の眞神にまします。之を學語にて云はば眞如法性等の名をもて其性質を詮表しまた實體實在などの名詞をもて詮表す。是性質より云はばまた宇宙精神とも云ふべきなり。

此永恆自然の本覺の如來の實體は本より已來本有常住にして一切の萬徳本自具備し玉はんも、ここに一度迷て無明に迷没する衆生にはこれを知見するに由なし、衆生は此を知らず自ら生死に流轉せり、凭る無明に迷へる衆生の爲に本覺法身の一大靈力即ち大自在の力より萬徳圓滿の性徳を現はして八萬の相好無盡の光明もて普ねく十方法界を照して信念の衆生を攝取して本覺如來の終局目的なるネハン即ち常住平和の淨土に引接し玉ふを方便法身とは名づく。

詳説せば法性身の如來は宇宙に周遍せる一大心靈態にして本無色無相にてすがたも形も超絶したる靈體にましますも、即ち無相と云も消極的の遍空の無相にあらずして積極的の無相にてあれば、無相は相として具せざるなき相なり。

本覺如來は法身大智慧の光明體にして一切處に周遍せる實在にましますも自在無碍の力より一切の無盡の相好身を現じたまふ。

若し本覺の如來は無色無相なればとて一切無盡の色相莊嚴の相をもて實現すべき徳性が存せざらしかば、法性身は實在の徳性が缺けたるものと云ふべし。

無相の實體より無邊功德の莊嚴身を現はし方便法身と曰ふ。方便法身とは一切衆生を本覺の都に歸趣の道を明にせんが爲の光として世に實現したまふ尊相なり。

これを方便法身と曰ふ此の方便法身の萬徳圓滿の相好を瞻仰して衆生がこの感應力によりて自己の心靈が開發し心性開發し來て觀する時は、色相莊嚴の方便法身は本來無色無相の本覺法身と同一本體にして一切の相を絶超したる眞法身なるを識る。妙色莊嚴の方便身を拜してそれが爲に衆生が無生の眞理を悟るが故に法性法身を知見す。衆生は此方便法身の誘引によらざる時はつひに法性法身を悟得すべき理あることなしこれによりて方便法身より法性法身を出すことは盡すなれ。出すとは方便身の紹介によりて法身を見出すことなり。

例へば宇宙の大虚の實體に太陽を實現すべき一大能力あればこそ現在の太陽を現出すなれ、太陽によりて宇宙の實在には凭る能力の存在を認むる已上は、能力の實在が無くてはならぬと曰ごとし。

今觀經に明し玉ふ。無量壽佛六十萬億の眞金色八萬の相好身、是の如きの無量塵沙の功德身は是如來一大靈力不可思議能の實現し玉ふものなり。凭る萬徳莊嚴の相好身を實現し玉へばこそこれを實現し玉ふ法性法身の實在を證するならぬ。

かゝる萬徳妙色のすがたは現せざるとも、如來法身の實在は變ることなきなれどもこれを實現せざれば衆生を度すること能はざるなり。

二種の法身。法性法身と方便法身とまた大論の法身佛と生身佛

この理を起信論に明しぬ。如來は本法身智慧の身にして形も相も得べきものにあらざるなれども、不可思議の一大靈力より無量の色身相好の身また金銀マニ眞珠ルリ寶玉をもて莊嚴せる美天國に快樂安穩妙の相をもて現はれ玉へり。而してその能現す處の本體は無始無終にて成壞の相なきものなれば、その現はるる處の色相莊嚴も隨て永恒不變にして破壞することも變し滅すること有ることなしと、故に如來の境界甚深なり。慧眼なき凡愚何ぞそれ思議すべけん。

法性身と方便身とは本より二體あるものにてはなく、方便不思議の妙色莊嚴の相は法性本體の上の用相として現はれしがたなり。無量莊嚴の色相が即無相の實體なり無相の實體と無量莊嚴の用相とは一體の兩面なり。さればこそ法性身の實體と同じく所現の色相も永恒に現顯して變易なく破壞なきなりと。

起信論にまた問を起して、法身無相いかかして相を現すやとの答のところに、如來法性身の相は大智慧の象にして本相なきこと譬ば鏡の體の如し。本來宇宙は一大觀念體の大なる圓鏡の如である。宇宙が精神の大圓鏡なれば衆生の信念に隨てそれに應じてその反映として種々の相好莊嚴の妙色が顯現するものなり。鏡體本相なきものなれども、これに對する人に對して其面影を映現す。

法相法身の大圓鏡もまた是の如く、法界は無形の精神態の靈智鏡に無量の形相顯現し重々無盡不可思議なり。

若し宇宙が本來如來の法身智慧の相にして大圓鏡ならばいかゞして吾人は其智慧の鏡の中に在りつゝ其の相好莊嚴を拜見することが能はざるべきぞとの答に、そは疑問の如く法界本如來智慧の鏡に相違なきも、その鏡に塵垢ある時は、其影像を映現すべきなし。若し鏡の塵垢を拭去る時は忽に其影を映現すべしと。

吾人が心性は本如來の一大靈性と一體にして無二無別なるものなれども、この肉の我が無明の爲に翳して自己眞性の鏡がくもりて本來自性の中に無盡の相好莊嚴淨土の

妙相を見ること能はざるなり。之は何故ぞとならば、如來法身大智慧の鏡は吾人が肉眼の對象なるものにあらざればなり。吾人が心眼は迷没して無明に迷ふ故に見ること能はず、若し如來の二種法身の相を知らんと欲せばいかゞしてこれを見ることをうるやとならば、これを知見すべき智眼を要せざるべからず。

#### 二種佛身のこと

前に如來には二種の法身ありて甲は如來の本體乙は所現の相好法身なることは已に説明しぬ。しからば能現所現何れも法身佛なることは同じ、此法身に對してまた佗方面に衆生の爲に肉體をもて世に出現せる佛身あり、之を生身佛と爲す。此二種の佛身を説明せば、智論に曰く佛に二種あり一法性法身二父母所生身、是法性身は十方虚空に滿て無量無邊なり。色像端嚴にして相好莊嚴せり、無量の光明無量の音聲あり、聽法の衆もまた虚空に滿てり。此衆もまた法性身なり。生死凡夫の所見にあらず、常に種々の身種々の生處にして種々の方便をもて衆生を度す、常に一切を度して須臾も息む時なし。是の如きは法性法身佛なり。

次に能く十方の衆生の諸の罪報を受くる者を度するは是生身佛なりとす、生身佛は次第に説法すること人法の如し。又云く法身佛は常に光明を放ちて常に説法す。衆生は罪あるを以ての故に見ず聞かざること譬へば日出れ共盲者は見ず雷霆地を振へ共聾者は聞ざるが如し。是の如く法身は常に光明を放ちて常に説法すれども衆生無量劫の罪垢厚重なることありて見ず聞かず、明鏡淨水面を照す時は則ち見るも垢翳不淨なる時は所見なきが如く、衆生の心清淨なる時は即ち佛を見若し心不淨なる時は則ち佛を見ざるが如しと。

此二種佛身の中に法性身佛とは前の方便法身佛なり、次の生身佛とは此界の人類に相應する人格をもて衆生を度せんが爲に出玉ひし釋迦牟尼佛なり。釋迦牟尼佛は無明に迷没する衆生に相應せる肉體をもて八相度生の相即ち肉眼にて見奉るべき尊體なり法身佛は肉眼の對象にあらずして法眼及び佛眼にて相應して觀すべき處の相好身な

經にかような説あり 此三界を離れて外に世界ありと説くは佛説にあらずしてそは外道の説なり、そはいかなる義ぞと云はば、此三界とは即ち吾人が生息せる處の無限の宇宙にてあり。此の宇宙なるものは本來無邊際である。この無邊際なる宇宙を離れて外にまた宇宙が存在して彼處に佛及淨土存在すと謂は謬見なり。

本宇宙は本來一體なれども衆生が自ら此の肉眼にてかく自然現象を感覺して居るものなれば、自家肉眼の所見が全く實在なるものと自定したるも、前に述べし如く佛眼等を聞き見る時は、吾人が未だ嘗て經驗せざりし美天國は忽ちに實現すべし、維摩經に斯ることを示されたり。維摩の説は五眼の項に出すべし。

佛の言く其心淨きが故に佛土淨し、諸佛がむかし菩薩の行を修せし時、其心淨かりしために其因業に報ふて感ずる所の佛土もまた清淨にてぞありと宣ひければ側に侍する處の舍利子は之を聽きて心竊に自ら解決し兼ねる疑團が胸中にあらはれたり、謂らく佛の宣ひし如く其心淨きが故に佛土淨しとならば今佛世尊即ち釋迦牟尼が菩薩の行を修し玉ふとき其心に於て不淨なることの在していまかく穢惡の土に於て成佛し玉ふとやせん、若し爾らざれば凭る不淨の國に在ますことはなからんものと、

時に螺髻梵王側に在りて舍利弗の言をききて即ち舍利弗に向ふて宣るるには、いかに舍利弗尊者よ爾はかやうな謂を作し玉ふことなかれ。いかにとなれば、我如き凡夫でさへ今此現世界を見るに其美しきこと梵王宮と異るなく瑠璃衆寶を以て國土を莊嚴するにあらずや。尊者よ仁者は斯く人間としての肉眼をもて此土を見るが故に穢惡充滿の處と見るらめ、若し斯る生得の肉眼によらずして佛慧の眼をもて此處を觀する時は必ず清淨莊嚴無比なるを見玉ふべきぞと。時に世尊をもて地を按し玉ふに、不思議や曾て目撃しつゝある穢土は其影だにも遺さず、忽ちに衆寶莊嚴の美天國と化し來

り瑠璃寶地に七寶行樹めぐり地より已上虚空に至るまで七寶の莊嚴萬物光輝を發し妙香覆郁として言語に絶せり。時に舍利弗奇異絶驚自ら然る所以を解せず唯茫然たり。時に世尊舍利弗に告曰はく舍利弗よ爾及び諸の衆生自ら業力によりて現に穢土を見るは常に微妙莊嚴の淨土に安住す、如來は常に淨土に在ます。

如來が安住したまふ清淨國土の中に於て衆生は不淨なる瓦礫荆棘の國土を感ず。しかれば吾人は佛陀の清淨なる美天國中に在ながら、いかゞせば其美天國に入ることを得ん。

本聖典に明しませる六十萬億の夜磨檀金の色に白毫の玉彩は妙高の五峯を合せ青白分明なる眸りは四の蒼海に比し、烏瑟は高く青天に碧を添たり。廣々たる珂雪の齒、八萬の相好は色相の極を現はし、無邊の光明は念佛衆生を攝取す。

是の如きの色相は如來一切靈力より本覺如來の性德恒沙の實相より顯現し玉ひて衆生を誘引せんが爲に十劫正覺の唱ひを示せしかども、實は無始より已來本覺の法身と齊しく常恒に十方法界に周徧して淨土ならざるはなし。しかるに衆生何故ぞ如來の清淨國土の中に在て衆生は穢惡充滿の忍土を感ず。衆生濁惡不善の世界の中に在て諸佛聖者は常寂光の極樂を觀ず。

吾人が生息する處の現宇宙を超て遠き彼岸に到りて初めて如來及び淨土を求むることなかれ。經に云く「アミタ佛去此不遠」。淨業成者即ちこゝに在て即ち瑠璃寶地に安住することを得べし。牆を隔てずして七重行樹は眺むることを得む。

萬徳の佛身は心眼開く處に現はれ、光明赫耀の淨利は淨業成ずる處に感せん。

佛陀は心眼未だ曾て開けざる衆生の爲に暫らく萬徳莊嚴の淨土を十萬億土の彼岸に在りと説けるも、法眼を開かしむる法を示してアミタ佛去此不遠と云ふ。是の如きの理由は能見の眼に種々あることを知らざるべからず。

能感の心機種々あるが故に所感の淨穢自ら不同あるの眞理を明らむべし。

能感の機能種々あるとは佛五眼をもて

五眼とは肉と天と法と慧と佛眼となり、初め肉眼とは即ち吾人が人類として自然に規定せられたる機能官能の眼官なり。こは解剖學また生理學に於て物理的に研究すべき器械的なり、この器械的官能が器械的に自然現象界を感見するものなり。この機械官能の功用は物理的にして恰も眼鏡に前鏡の物色を映寫すると同じ用なり。さてここに於て此器械的の肉眼なるものなかりせば日光も明輝なるを感覺せず、天火もまた炳なりと見ざらん。盲者が太陽の光明を見ざるも日光それなからんや。之と同く、肉眼眼のみありて已上の四眼の境界に於ては吾人は盲者の謗は免るべからず。吾人は淨土に更生する人に對せば不具根缺の人といはざるべからず。

さて肉眼已上の四眼とはいかなる眼根にてまたいかなる境界を觀見すべきものならむ。开を開まほしくぞ欲ふ。

其四眼とは天眼法眼慧眼佛眼。これを前の肉眼と合して五眼とは名づくなり。

天眼とはいかなる感能の用をなすぞとならば、天眼とは天は天然即ち自然の理法なり、若し人の心意が外界の爲に動かされず、天仙の如くに從容として自然と同化し没しぬれば、自己の精神と自然界とは本來同一體の物にしあれば、自から神通感應して自然界中に現象せるものは神通して自己の心眼に感交し來る。

かの六通を得たる羅漢がここに在て座禪の床に坐して世界中の千萬里の彼處の出來事を感じするが如き。かの天眼の一端とも云べき催眠術によりて見るも、身は東京に在て西京の事物を見るが如き是なり。斯術に於ても其修練の程度熟達の成不あり、若し能く熟達して全く自然と一致し同化したらんに、自然界の一切の現象は掌中の珍果を見るが如しと、經中の文焉ぞ夫れ怪むに足らん。しからば經に天眼をもて千萬里の彼處の細塵を見ること掌中のアンマラ果を見るが如しと。

主體の方は器械的の肉眼にあらずして即ち自然と一致したる心眼にして客體の方は

自然界に現象せる一切の色相を見るを天眼とは云ふ。

次に慧眼のことを説明せん、慧眼とは智慧の眼と云ふことにて、こはやはり心眼にて其對象となるものは自然現象界にあらず、即ち觀念界である。視よ吾人が肉眼は器械的にして外界に望む時、其距離が益々遠大なるに及んでついに感覺盡て之を明瞭に見ること能はざるに至る。然るに肉眼に藉らずして吾人が自から觀念をもつて宇宙の大を觀する時は、宇宙は渾然として一體、彌、心力を盡して觀する時は一大觀念態は法界に周徧し蕩然として一切の萬象の影は沈没して現せず、混濛浩汗として大海に望むが如く、肉眼に幻現し來れる天體の無邊も悉く隱没して宇宙無限と一體觀となり、能觀の心と所觀の界とは 然として一致し、能觀の慧が法界に周徧しこの對象となるべきもの一塵の影だにあるなし。かゝる觀慧を慧眼とは名づく。

次に法眼とはいか成る境界を感じするぞとならば、先に説明したる慧眼は一大觀念態にして萬象の影もなくただ一大圓相の如く元來無一物の體なり。法眼の對象はその慧眼の一大觀念界中に顯現する處の靈的感覺なり。この對象を觀所成色と云き斯聖典に示せる處の衆寶莊嚴淨土の靈象六十萬億八萬の相好身等は全く法眼所照の境界にして肉眼の對象たる感覺界に求むべからず。

若し人法眼を開き來て觀する時は處として衆寶莊嚴の淨土ならざるはなく如來の相好光明遍滿せざるなし、斯る萬物が光明光輝を放ちつゝある淨土の中に在ながら、法眼未だ曾て開かざる衆生は美を盡し妙を極めたる美天國の莊嚴は觀ること能はざるなり。喩へば麗日輝きををさめんとする入口の夕ある光景を肉眼なき人は之を見る能はざると同じく、吾人が肉眼の失ひる者に對してこの光景を見ざるを嘲ける吾人はまた未だ法眼なくして美天國を觀すること能はざるなり。然らばいかゞして法眼を開きて淨土の莊嚴を觀することを得べきとならば。

法眼は淨業成就の心眼なれば是自然の生得にあらず、前に二種法身の中に就て法性法身は慧眼をもて觀すべく、方便法身は法眼をもて之を觀すべき對象なりとす。

次に佛眼とは佛陀が萬善の修行の結果として本覺の體相用と一致したる處に成就したる心眼にして佛眼は前の法眼と慧眼とを統一綜合せる慧眼にて法慧の二眼は本より何れも心眼にして其體は同一なれども其對象が甲は觀念界の差別の心象を見乙は無差別の實相を觀す、之を統一せるものが佛眼にてあれば、佛眼をもて觀する時は宇宙一大觀念界の大圓鏡に重々無盡の莊嚴法界ありて存す。

佛陀は五眼圓かに明かに自然界と睿智界とを雙照し、慧眼の無相界と法眼の高等感覺界とを併觀する大自由を得玉へり。

ここに於て理感二性の宗教に理性宗はすべて感性を排除し先天的の觀念のみを重んじて、感性と云はば自然のみならず高等なる感覺靈象の淨土の莊嚴までを否定せんとし、感性宗は感性と曰はゞ宇宙大圓慧界の靈的現象なるを知らず、幼稚なる天然教と超自然教と併合せる如き衆寶莊嚴の天國は自然界を超たる彼岸に自然界のと同じき物質的の感覺界の淨土實在せりと謂へり。

若し大乘佛敎の圓滿なる修多羅が教ゆる處に依て實修實行し、佛陀所證の極樂毘藍界を唯客觀の自然界に求めず、全く主觀的に實修し法眼已上の三眼開目し來て觀する時は此を去らずしてアマタ佛衆寶莊嚴の淨土を見ることを得べし。

五眼明了に開き來て始めて圓滿なる佛敎を信ずることを得べし。或る一流の理性宗が偏執する如き佛界は唯偏空的の涅槃界に墮すべきなくまた凡夫が執する如き唯自然の實在を實在と執する虞なかるべし。

今美天國を開くの寶鑰は、

美天國は自然界の有頂天九蒼の空に求むべきにあらず、若し全く自然界の蒼天に地位を占むるものと云はゞ、天國を開くの鑰はいかゞして吾人は之を手を探ることを得べし。

淨土を開見するの寶鑰

清淨莊嚴の國土即ち美天國は幼稚なる自然的實在即ち極樂は吾人が衣食せる如きの

物質的實在の即ち全く彼土の宮殿は金銀ルリ寶石をもて全く工巧が人工をもつて造營構成せし宮殿樓閣また七重の寶の樹は木より園丁の栽培より成立るものにあらず。

衣服の莊嚴の具も裁縫縫染澣濯を要すべきものにもあらで皆自然應法の妙服とす。また食物にしても七寶の蓋器自然に前に在り、金銀などのもろもろの蓋はその思のまにまに其處に顯はれ百味の飲食は自然に盈滿すといへども實に食するものなく唯色を見香を聞きて意に食せりとおもへば自然に飽足す。またこの清き國土は安穩にして微妙なる快樂あり。本より彼處は無爲涅槃の靈界にませばもろくの聖者は智慧高明にして神通洞かに達し咸同じく一類にして其かたち異状あることなく、天人とは名にこそ云ならめ其實には清淨法身は宛がら虚無の身無極の體、衆の物質元素より化合せられたる細胞の聚合物にてはあらず。

されば觀經また無量壽經に詳かに讚し玉ひしかの莊嚴淨土の光景は本より自然物業の成立したるものにあざれば、かの淨土の門を開きて無盡の莊嚴藏を實見せんとならばいかなる鑰をもてか之を開くことを得ん。

此につきて若しも清き國を自然物業の中に求め全く幼稚なる物質實在の概念をもて淨き國の門を開かむと欲する如きあらばそはつひに不可能の事に屬するのみにあらず凭る理山は有べきはづなきものなり。

美天國は吾人の如き唯肉眼のみの凡夫に對しては其所在を認識するに由なし。斯ればこそ密敎にては天國を號くるに密嚴淨土と曰ふそは秘密莊嚴の義なり。秘密なる所以は、宇宙本來諸佛の清淨莊嚴の國土にあれども衆生は佛眼なきが故に其中に住在しながら之を見聞すること能はず。

實に全宇宙には重々無盡不可説の衆寶莊嚴海を以て充さるるともそはみな諸佛如來海印三昧中の現象にして凡夫が感見すべき物質實在の莊嚴にあらず。されば之を開くべき秘密の寶鑰はいかにして之を吾人が手に入ることを得べきとなれば佗に求むべからず、如來は我等が爲に宇宙秘密の莊嚴藏を開くべき寶鑰を與へ玉へり。佛陀が王舎

城に在して韋提希夫人の爲に示玉へる觀無量壽經こそ其の淨土の門を開くべき寶鑰なり。この寶鑰に藉らずして天國の門を開くと云ふの理あることなし。觀經一部の全文をもて淨土の寶藏を開くべき寶鑰なりと云とも聖典の全文また繁し、若し之を直ちに寶鑰にすることを得ば實にこれ幸福なり、單刀直入いかに寶鑰かこれ天國の藏を開く我はこれ實に、

我は生死の凡夫なり若し天國の鑰を授るの光榮にあらざれば我は空しく闇黒の獄に我神は沈ぬべし、ア、哀れ悲し。天國を開くの寶鑰は決して形質のなかに求むべきにあらず、汝が心靈の深奥に秘める神の聖子在すを知らずや、神は汝が爲に天國に到るべきの豫地を與へ玉へり、また天國を嗣べきの素性を與へ玉へり。

天國を開くの鑰とは即ち念佛三昧なり、念佛三昧とは、經には韋提希夫人が我に思惟を教へ玉へ我に正受を教へ玉へと。この思惟と正受とが即ち天國を開くの鑰なり。この思惟正受をまた善導大師は念佛三昧また觀佛三昧をもて宗とすと曰へり。

#### 秘藏の寶鑰

吾人は未だ法眼開けざれば親しく美天國を見聞するの明なしと雖も、今は美天國と云も全く此宇宙を超て高遠なる彼岸に方域を定めたるものにあらず、現在吾人が住める宇宙に於て吾人が業識即ち生理の器械的の肉眼に見る處を娑婆と名づけ、若し佛陀の見たまふ處の如く、佛眼を開きて觀する時は即ちここが即ち常寂光の都にてありと云ことは、今は大に領解せり。然る時は已に理に於ては更に疑團なきなれども、全く自から心眼開發して自から親しくこれを経験せざるほどは自ら安んぜざる處なり。請ふ願はくば我ためにいかに修養を要して而して全く親しく如來の心光に接し淨土即ち天國の樂園に逍遙することを得ん、唯我が爲に示されんことを。

答へて。天國遠にあらず、此身を捨て何の處にか求めん。淨土甚だ近し己心の中に在て顯はれん。

如來は美天國を隠秘し玉はず、衆生自から隔つるのみ。之を礙るものは衆生自身の

心中にあり。淨土を見るの明を障るものを無明と名づく。

如來は天國を開くの寶鑰を授け玉へり。

天國の鑰とは何ぞや即ち教祖釋尊が之を王舎大城王宮に於て韋提希夫人の爲に竊に授け玉ふ。

釋尊が韋提希夫人の爲にこの寶鑰を授け玉ふ因縁を説かば、觀經の序文是なり。

寶鑰とは即ち王舎城の王宮に於て教祖天尊が韋提希夫人の爲に説玉ふ一卷の觀無量壽經是なり。此觀經とは即ち念佛三昧の鑰をもつて無量壽即ち神及び神の聖國を開きて親しく觀見すべき妙法を教へ玉ひしなり。佛陀はいかなる因縁によりて韋提希の爲に此寶鑰を授玉ひしや。また韋提希はいか成必要を感じてか天國を開くべき鑰を佛陀に求めたりしやを暫らく説明せん。

教祖佛陀がギシャクツ山に住し玉ひて諸の菩薩聖者の爲に化を垂れ玉ひしに、時に王舎大城に阿闍世太子なる王子あり。時にかの惡友に提婆調達なるものの誘惑によりて其父王ビンバシヤラを收執へて幽閉せる室内に置きて飲食の供養を斷ちて大膽にも父王を殺害せんとの謀計をめぐらせり。其門を護衛して臣下をして其出入を制しけり正妃イダイケこれを傷ふに忍びず工夫をめぐらし酥蜜を以て酥に和せる食を其衣の裏につゝみ蒲桃の漿を身の莊嚴の具たる璣珞の中に盛て密にもて王に奉る。大王は之を飲み之を食しまた靈山に在ます世尊の聖徒たる目犍連を請して八戒をうけ、能辯家の聞えあるフルナを聘して法要を問玉ふ。大王は酥蜜を食しまた肉體の榮養としては麩蜜及びブトウ漿を以てし、心靈の爲には佛の正法の養あり、爲に身心安隱し顔色和悦にまします。時已に三周を経しも父王の健全に在し崩し玉はざるは母后の勸

(以下少しく中絶)

觀經には先づ方便觀として初めに日想觀水想觀を修すべきを教へ玉へり。日想觀とは先づ夕陽の重暈ををさめて斜に西山に入らんとするとき形龐しく大鼓の懸たる如きの相狀を見てこの印燒に意思を注ぎ一心一意専ら餘念なく思想觀念、神を凝すときは

最とも上根なるものは一座にして明相を發見することを得ん。

明相とは其大さ錢許りの如くまた鏡面の大の如き光曜晃々として喻ば日光の澄澄たる清水に映せる如く美天國の莊嚴藏を開くべきの第一驅は光耀なりとす。或はまた微妙奇麗なる華を感じるあり、または瑠璃寶地等の種々不可思議なる靈感を實驗することあり。近頃或る青年が病床恍惚の間に光耀に感觸せるを甚だしく自から世に吹聽せるあり。それらは若し眞面目なる宗教家ならば自から秘して佗聞を慎しむべきなり。殊に光耀を感ぜし如きは若し専門家の門に入り軌矩を得て之を修養する時は導師の曰ひし如く一座にして之光曜を感見する者あり。尙進んで觀佛三昧に神を凝し觀察を用ゆる時は觀經に説相たるルリ地の内外映徹せる光明華の如く星月虚空に懸處せる如き百寶合成の樓閣は蒼天に聳へ七重行樹は衆寶をもて莊嚴し林寶地には功德の水湛へ水はマニ珠玉より噴出しまた無量の光を放ちて光より百寶の化鳥を化出する光景、また無量壽佛は炎浮檀金の色八萬の好相光明は普く宇宙を照す。これ觀經の所説暫く美天國の縮圖を略説せるに外ならず。

觀經は天國を開くの寶鑰として韋提希及び一切衆生の法眼の失ひたる者の爲に説玉ふことは已に信ぜり、而してまた日想觀の方便は吾人が法眼を開くの妙法なることも已に承認せり。然るに今進んで愚生が求むる處はず、すべての方便を捨て暮直に如來の心光と接觸すべき法あらばこれにつきて直に凝神精神を修養せんとす。

されば善導大師は本經一部の宗教とする處觀佛三昧を宗と爲し亦念佛三昧を以て宗とす。經には一々之を觀して極めて了々に閉目開目にも散失せず、唯睡時を除きて恒に此事を憶へ、如是の想を名つけて粗極樂の地を見るとす、若し三昧を得ば彼國地を見ること了々分明にして具に説くべからず。

また一ら佛を憶ふべし、所以はいかに、如來は是法界身一切衆生の心想中に入玉ふ

是故に汝ら心に佛を念ふときは心即是三十二相八十隨形好なり、是心佛を作る、是心是佛なり、諸佛正徧智海は心想より生ず、是故に汝ら一心に佛を思ふべし。

導師は若し行者等此三昧を修する時には失意瞽盲暗啞痴人の如くならば是定得易し若し然らずんば三業は縁に隨て轉じ定相波を逐ふて飛び、縱令千年の壽を盡すとも法眼未だ開けずと。

之れ念佛三昧の寶鑰を用ゆべき修養法をかくもよく經驗に富める處の導聖が吾人が爲に指南し玉ひしなり。要する處行住座臥二六時中唯一ら佛を思想憶念し。

一心に佛を念する外に佛眼開くべき原因あることなし。

念佛三昧に神を凝し若しは漸次に若しは頓速に如來の心光の和氣に感じ法眼即ち開くべし、法眼開くとき即ち我心靈の障礙なり、譬へば金鳥東天に昇りて春夜の眠より醒るとき乾坤面目を現はす如く、心眼の醒たる曉に於て清き心靈界は霽れわたれり。神秘の美天國は開かれたり極樂の東門は開たり、其美天國の衆寶莊嚴の光景萬物は晃耀焜耀として極りなし、其象相具には觀經に説玉ひし如く具さに説くべからず。

聖源空は平素専ら口稱の一行を以て多年の功つもあり竟に三昧を發得して淨土の莊嚴寶地また如來の相好色身等を觀玉ふ。されば自から詠じて、阿彌陀佛と稱ふ計りを勤にて淨土の莊嚴觀るぞ嬉敷。然聖好相感見のことは自から記し給ふ三昧發得記に録せり。

宋の高僧慈雲法師の勸むる處は甚だ易行なり。意に曰く、人若しは官に朝し利の爲に市に趨る、業務多端なるも常に意に佛を憶念すること譬へば若し人心中に切なる事故の密に懸念して其胸中に往來するあらば縱令身の業事作務の中に於ては心中の密事は失はざるが如し。若し常に中心實に佛を嘉せば何の口か之を忘れむ。意常に佛を憶念する時は方便を假らずして見佛を得。譬へば香を器に容れ置く時は器物還て香を薫ずる如く、意常に佛を憶念すれば佛に同化す。若し衆生の心意佛を念する時は佛化せざるを得ず。若し心意佛化する時は心佛を見る何ぞ難からん。



美天國を開くの寶鑰は、佛教に門を説くこと甚だ多しと雖も、見佛三昧をもて最とす。行住度臥時處處諸縁を擇ばず、唯一ら如來を憶念するにあり。若しは口稱にもまた觀念にもそは其人の意樂にまかすのみ。口稱また觀念等は手段にして見佛をもて目的とす。心眼開發して見佛するを宗とす。見佛の要は一切心意を佛化するにあり。若し心眼開發し正しく佛及淨土莊嚴は正に現前す。如來光明に由て自己を觀する時は自己の觀念即ち法界に周徧す。所觀の如來の光明遍法界の故に能觀の心念また法界周徧なり。ここに於て時間に於ても空間に於ても一切の時一切の處に於て如來と寸毫の懸隔あるを見ず。形式に於て如來と接近不可離の關係を完するを近縁と云ふ。

次に如來光明を不可離的に證認するのみにあらず、如來の内容と仰ぐべき大我の愛即ち無縁の慈悲と吾人の心情とは融合し、如來大我の大慈悲の暖溫に感觸して吾人の心情を融融し不可思議歡喜無量、如來と衆生との親密なる關係は、如來の慈愛は父の如くまた母の如く、父にあらざれば生ぜず、母にあらざれば育せず、また如來に對する愛慕の念は戀人に對する如きあり、また愛の維繫は同愛同喜相愛親和の感情は其内容を一にす、愛する人の喜は即ち吾喜びと感し、

如來の大愛光に對する衆生の愛樂は其親密の濃かなること其愛慕の甘きことまた加ふるなし。故にこの關係を愛人の親和に比すべし。

尙深く如來に對する親縁の内容は靈我の即ち大なる我を此と彼との兩方にあらはれし如く、靈我をあなたに投映して如來なるや、如來の大我が我靈我として我靈と現じ來りしや、此彼融合して相分つべからざる不可思議心情として靈的活動し現ぜり、之の内容の最親密なる關係を有するが故に親縁と曰ふ。

如來の中に常に光明に靈化し更生し來りて後の精神生活には、如來の光明は増上縁の加被力となりて衆生の開き心に光を與へて俗にいはゆるアキラメが能くなる。アキラメとは眞理の光明に自己を返照し理性の光として能く自己の感情を自覺して自ら感情を諭すこと、例へば今我病氣を傳染せしにつき云はゞ、我人の爲に看護し而して此

病を傳染せし全く己が不注意の爲に起因す、決して佗を恨むべきにあらず、また俗に云はゞ宿縁の免れざる處とかまたは自己の意向に於て正しからざりし爲とか、なを進んで如來の光明によりて自己を照し見る時は敢てせず、エビクタヌが未だ哲學を學ばざる時は自己佗人を責む、而して道に入りて後には人を責めず、自己を責む、修行よく熟する時は人をも己をも責めずと言ふ如く、能く如來の光明によりて自己を返照するときは、いか成出來事禍害に遇ふとも自ら全く理性の光にて照す時は世上の感情は慰安と感じ來る、意志を靈化する増上縁。

大正十四年四月二十日印刷

同 廿五日發行

誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)

年十二冊二圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成  
發行人

東京市小石川表町一〇八番地  
印刷人 中橋 昌平

發行所

東京市小石川區水道橋二ノ四四  
ミオヤのひかり社  
電話東京六八五一番